

「教育臨床総合研究11 2012研究」

尺八を用いた中学校音楽科の授業実践の試み

— 「鹿の遠音」を手がかりに —

A Practical Study of Shakuhachi for Junior High School
Music Education : A Case Study of *Shika no Tone*

高木 いずみ*

Izumi TAKAKI

藤井 浩基**

Koki FUJII

要 旨

2008年の学習指導要領改訂で、中学校音楽科では、「和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること」と示された。本研究は、中学校音楽科における和楽器の学習の一環として、尺八の鑑賞と表現の活動を郷土の伝統音楽の学習につなげていく試みである。松江市宍道町にも縁のある尺八古典本曲「鹿の遠音」に着目し、同曲の教材研究と大学院「学校教育実践研究」における授業実践をまとめ、尺八の教材開発と指導法の一案を提示した。

〔キーワード〕 尺八、鹿の遠音、松江市宍道町、和楽器、郷土の伝統音楽

I はじめに

本稿は、中学校音楽科における和楽器の学習の一環として尺八を取り上げ、尺八古典本曲「鹿の遠音」を手がかりに、教材開発と指導法の在り方を考察するものである。

1998年告示の学習指導要領において、中学校の音楽科では「和楽器については、3学年間を通じて1種類以上の楽器を用いること」と示された。移行期間も含めて、それから約15年が経ち、中学校における和楽器の学習も確実に定着してきている。2008年3月に告示された改訂・学習指導要領では、「和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること」と示された。『学習指導要領解説音楽編』では、「箏、三味線、尺八、篠笛、太鼓、雅楽で用いられる楽器などの和楽器については、その指導を更に充実するため、中学校第1学年から第3学年までの間に1種類以上の和楽器を扱い、表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫することを示している。生徒が実際に演奏する活動を

* 島根大学大学院教育学研究科

** 島根大学教育学部芸術表現教育講座

通して、音色や響き、奏法の特徴、表現力の豊かさや繊細さなどを感じ取ることは、我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことにつながっていくと考えられる」と説明されている（文部科学省2008：61-62）。つまり、和楽器の表現活動を通じて「我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうこと」が、和楽器の学習の趣旨として明確化された。さらに、演奏する活動が「音色や響き、奏法の特徴、表現力の豊かさや繊細さなどを感じ取る」ことのできるレベルであることが具体的に示され、従来の「用いる」から、ふみこんだ基準が示されたと言えよう。

我が国の伝統音楽はともかく、「郷土の伝統音楽のよさを味わう」ことを念頭に置いたとき、そこには味わう対象となる「郷土の伝統音楽」を設定しておく必要がある。そこで、高木いずみは自身の出身地である松江市宍道町に息づいている尺八の文化について着目し、尺八の表現活動と郷土の音楽としての尺八楽との結びつきをテーマとした授業実践と教材開発を試みている。

同町は、尺八の名手、木幡吹月（1901-1983）ゆかりの土地として知られている。木幡吹月は、かつて松江藩主の本陣をつとめた自宅の「八雲本陣」に山陰尺八道場を開き、普化宗古典尺八の普及につとめた。また、尺八に関する資料や古管を数多く収集したことで全国的に高く評価されている。同町には、「菟古館」という施設があり、木幡家所蔵の美術品、工芸品のほか、由緒ある尺八が多数展示されていた。しかし、残念なことに、本研究に着手しようとした矢先の2011年4月に閉館し、現在、収蔵されていた尺八や関連資料を見ることができなくなっている。

月溪恒子は、木幡吹月のコレクションについて著書『尺八古典本曲の研究』のなかで詳しく言及している。そのうち、月溪は特に重要な資料として「秘曲鹿遠音譜」（嘉永6年、1853年）を取り上げている。月溪は同著で、八雲本陣記念財団蔵の「秘曲鹿遠音譜」の写真を掲載し、次のように解題している（月溪2000：219）。

「『秘曲鹿遠音譜』 嘉永六年（一八五三）

……一覧表にはないが、重要な史料なのでここで解題する。

この一枚ものの史料（縦三九四ミリ、横五二四ミリ）は、二世荒木古董が出雲出身の虚無僧、廣瀬茂竹に与えた《鹿の遠音》譜とその許書である。……この譜を含む廣瀬茂竹関係の史料五点は、茂竹の弟子の岡垣加竹の遺族が所持したもので、昭和二十四年にこれを譲り受けた木幡吹月（島根県宍道町八雲本陣第十四世当主、本名久右衛門、一九〇一～一九八三）が所蔵した。現在は八雲本陣記念財団所蔵、宍道町立菟古館保管。」

「鹿の遠音」といえば、音楽科授業における尺八の代表的な鑑賞教材である。そこで、和楽器の演習と郷土の伝統音楽のよさを味わう手がかりとして、松江市宍道町とも縁のある「鹿の遠音」を取り上げた授業の構想を模索している。本稿はその序論的考察である。

前半では、教科書における尺八の教材の変遷をたどり、教材としての「鹿の遠音」の位置づけを明らかにしていく。後半では、高木が、島根大学大学院教育学研究科の「教育実践研究」として、島根大学教育学部附属中学校の第3学年の生徒を対象に行なった授業実践記録に基づき、「鹿の遠音」を糸口とした授業の試みを報告し、尺八を用いた授業の可能性と課題につい

て検討する。

高木は、都山流尺八の稽古に通い、2012年2月に「初傳」の免状を取得した。自ら尺八の演奏を手がけることで、視聴覚教材のみに頼らずに、尺八の奏法や音色の違いを教師自身が説明できる授業実践をめざしている。本稿での高木の執筆箇所は、Ⅱ-2、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴである。

藤井は、これまで山陰地方を中心に、酒井；藤井（2008）など郷土の音楽の教材開発に関連する研究を蓄積してきた。ここでは、共同研究者及び指導教員の立場から、高木の授業実践に随時助言を行なうとともに、本研究の意義と課題について考察した。藤井の執筆担当箇所は、Ⅰ、Ⅱ-1である。

Ⅱ 教材としての「鹿の遠音」

1. 尺八古典本曲としての「鹿の遠音」

「鹿の遠音」について、月溪は次のように解説している（月溪2000：247）。

鹿の遠音 しかのとおね

一般に鹿の遠音と書くが、楽譜では鹿遠音または鹿之遠音。

- ① 琴古流本曲、裏十八曲中の秘曲一曲。一計子より伝来、と『琴古手帳』にある。本来の曲名である《呼返鹿遠音よびかえ（へ）ししかのとお（ほ）ね》が示すとおり、二人の奏者が交互に演奏する。この吹奏形態は古典本曲ではこの曲が唯一。琴古流初期から交互演奏され、『一閑流尺八本曲譜全』（一八四七）にも雌雄の鹿の音声と記されている。ここから、雌雄の鹿が鳴き交わすと解釈されてきた。しかし、雌鹿は遠吠えしないため、雄鹿の声の木霊ともいわれる。
- ② 明暗対山派本曲。現行明暗寺所伝曲では「奥伝」に属す。琴古流から移入後、樋口対山が大幅に改編。
- ③ 明暗真法流本曲。①②とは異曲。

尺八界には大小含め数多くの流派が存在する。古典尺八の伝統を守り抜く流派や新しい尺八音楽の可能性を試す流派などその実態は多様である。代表的な流派には琴古流と都山流があり、他にも明暗流や西園流などさまざまな流派がある。流派によって尺八の歌口の形や記譜法が異なり、それぞれの「本曲」を持つ。

「本曲」とは、尺八のためにつくられた楽曲を意味する。それに対して「外曲」という、箏曲や地歌などの旋律を尺八用に編曲したものもある。本曲の中でも、特に普化宗で傳承されてきた江戸時代に成立した音楽ジャンルを「古典本曲」という。

「鹿の遠音」も、古典本曲の一つである。月溪（2000）が指摘するように、琴古流、明暗対山流、明暗真法流が「鹿の遠音」を本曲としている。古典本曲には、同じ曲名でも異なった旋律をもつものや、逆に異なった曲名をもちながら類似性のあるものもあり、この現象を月溪は「同名異曲と異名同曲」とよぶ（月溪2000：7）。「鹿の遠音」は基本的に2つのバリエーションしかなく、他の本曲にくらべ少ない。古典本曲は尺八の歴史的な問題から、宗教的な意味合いをもつ作品が多いが、「鹿の遠音」は、その中でも、芸術性の高い作品として知られている。

神田可遊は「鹿の遠音」について次のように述べている。

「本曲は民謡のように、作者が不明で、時代や地域、奏者によって『自然に』変化し、伝播したものと考えられるが、遠音はこうした範疇にはない。どう聴いても『作曲』された曲であると思わざるをえないほど、緻密に計算された構成で、一步飛躍した近代感覚の曲となっている。曲のモチーフは『おくやまに 紅葉ふみわけ 鳴く鹿の こえきく時ぞ 秋はかなしき』（猿丸太夫）であろう。秋の深山に妻を恋うて鳴く雄鹿の甲高い声が、こだまとなって響き渡る様を表現した名曲で、特に琴古流では明治以降、尺八演奏会で最も多く演奏されてきた本曲である。」（神田2009：53）

このように、尺八古典本曲の名曲として位置づけられてきた「鹿の遠音」は、音楽科授業における尺八の代表的な鑑賞教材として導入されてきた。そこで次節では、中学校の音楽科の教科書でどのように「鹿の遠音」が解説されているか、また指導のポイントが示されているかに着目しながら、尺八の教材の取り扱い全般についてみていきたい。

2. 中学校音楽科の教科書における尺八の教材の変遷－「鹿の遠音」の取り扱いに着目して－
学習指導要領の変遷をうけ、教科書における尺八の取り扱いがどのように変化したか、分析し表にまとめた。分析は、教育芸術社の教科書における尺八の独奏曲の取り扱われ方を対象に行った。

使用した教科書は以下の年度のものである。

1969年度 1972年度 1978年度 1981年度 1984年度 1987年度
1990年度 1993年度 1997年度 2002年度 2006年度 2012年度

表のまとめ方に関して以下の4点に留意した。

- ① 表内のタイトルと項目は、教科書の表記のまま記した。
- ② 写真、図は、基本的に教科書の表記のまま記し、キャプションのないものに関しては筆者の言葉で記入した。
- ③ その他の尺八曲の欄には、三曲合奏など、尺八が使用される曲を記入した。
- ④ 器楽の教科書は対象外とする。

(1) 1969年度

尺八教材曲の掲載なし

教科書情報	市川都志春ほか5名 『中学生の音楽』, 1968年文部省検定済
その他の尺八曲(学年)	「春の海」(1年)

(2) 1972年度

教科書情報	市川都志春ほか5名 『中学生の音楽』, 1971年文部省検定済
タイトル	鑑賞1 尺八曲「鹿の遠音」作曲者不明
学年, ページ数	3年, 1ページ
目標〔研究〕	<p>■微妙な音程の変化や, はっきりした拍子のないリズム, あるいは特徴ある音の変化など, 独特の味わいがある。</p> <p>①曲の感じ(目をつぶって聞いてみよう)</p> <p>②音程・リズムなどの特徴</p> <p>③尺八のいろいろな音色</p>
項目	曲について, 尺八について, [研究], 鹿の遠音(上の尺八の楽譜を独奏用の五線譜に直したもの)
写真, 図	尺八の楽譜, 尺八を吹く普化僧, 運指, 五線譜(独奏用, 調号なし, 拍子なし)
その他の尺八曲(学年)	三曲合奏「四季の眺め」(1年)
備考	「鹿の遠音」を百人一首の和歌にたとえている 1969年改訂の学習指導要領で鑑賞共通教材として「鹿の遠音」が提示された

(3) 1978年度

教科書情報	市川都志春ほか5名 『中学生の音楽』, 1977年文部省検定済
タイトル	尺八曲「鹿の遠音」作曲者不明
学年, ページ数	3年, 1ページ
目標〔研究〕	<p>①微妙な音程の変化, 自由な拍子やリズムによる独特な美しさを味わおう(このような技法は, 現代音楽の中にもとり入れられている)。</p> <p>②私たちの縦笛の音楽とは, どんな違いがあるだろう。(拍子やリズム・音程・音色など)</p> <p>③日本の伝統音楽と西洋の音楽とを比較し, それぞれどんな特徴があるか考えてみよう。</p>
項目	●普化尺八, ●尺八の表情, ●本曲と外曲, ●演奏の形, [研究]
写真, 図	尺八の楽譜, 尺八を吹く普化僧, メリ, カリ, 五線譜(2本の尺八, ♭3つ, 2分の2or3拍子)
その他の尺八曲(学年)	なし
備考	「鹿の遠音」を百人一首の和歌にたとえている

※尺八の表情 にはメリやムラ息, ナヤシ等の奏法の解説が記載

(4) 1981年度

教科書情報	市川都志春ほか6名 『中学生の音楽』, 1981年度用
タイトル	鑑賞1 尺八曲「鹿の遠音」作曲者不明
学年, ページ数	3年, 2ページ(下半分は年表)
目標	<p>1.尺八の音色の美しさを感じ取ろう。</p> <p>・今までに聴いた木管楽器と, 尺八の音色の違いに気を付けて聴こう。</p> <p>・尺八の変化に富んだ音色は, どのようにして生まれるのだろう。</p> <p>2.尺八音楽の奥深い豊かな表現を味わおう。</p> <p>・旋律や, 拍子・リズムの流れが西洋音楽と違っている。どのように違うか気を付けて聴こう。</p>
項目	◆尺八の奏法, 【楽曲と尺八について】

	【参考曲】・鶴の巢籠（作曲者不明）…江戸時代の曲 ・ノベンバー ステップス（武満 徹）…現代曲
写真，図	メリ，カリ，「鹿の遠音」の楽譜，虚無僧
その他の尺八曲（学年）	なし
備考	「鹿の遠音」を百人一首の和歌にたとえている 五線譜の記載なし

(5) 1984年度

教科書情報	市川都志春ほか8名 『中学生の音楽』，1983年文部省検定済 1981年度と同様
-------	---

(6) 1987年度

教科書情報	市川都志春ほか9名 『中学生の音楽』，1986年文部省検定済
タイトル	鑑賞1 尺八曲「鹿の遠音」作曲者不明
学年，ページ数	3年，2ページ（下半分は年表）
目標	1.尺八の音の美しさを感じ取ろう。 ・響き…今までに聴いた木管楽器との違いに注意しよう。 ・響きの変化…下の奏法についての説明を参考にしよう。 2.尺八音楽の奥深い豊かな表現を味わおう。 ・旋律・拍子・リズム…西洋音楽との違いに注意しよう。 参考曲「ノベンバー ステップス」武満 徹 作曲（現代曲）
項目	◆尺八の奏法，【楽曲と尺八について】
写真，図	「鹿の遠音」の楽譜（例），メリ，カリ，虚無僧，五線譜（2本の尺八，b3つ，拍子なし）
その他の尺八曲（学年）	なし
備考	「鹿の遠音」を百人一首の和歌にたとえている

(7) 1990年度

教科書情報	市川都志春ほか9名 『中学生の音楽』，1989年改訂検定済 1987年と同様
-------	---

(8) 1993年度

教科書情報	市川都志春ほか8名 『中学生の音楽』，1991年文部省検定済
タイトル	尺八曲「鹿の遠音」 作曲者不詳 鑑賞5
学年，ページ数	2.3年上，1ページ
目標	●独特な奏法による音色の変化に注意して聴こう。 ●今までに聴いた木管楽器との違いに注意しよう。 ●尺八の奥深い豊かな表現を味わおう。
項目	楽曲と尺八について， <u>尺八の奏法</u>
写真，図	演奏中の写真（2人，座奏），メリ，カリ，五線譜（2本の尺八，b3つ，拍子なし）
その他の尺八曲（学年）	「ノベンバー ステップス」第1番（2.3年上）
備考	琴古流の記譜による楽譜の掲載なし 虚無僧の写真なし

(9) 1997年度

教科書情報	市川都志春ほか8名 『中学生の音楽』，1996年文部省検定済
タイトル	尺八曲「鹿の遠音」 作曲者不詳 鑑賞6
学年，ページ数	2.3年上，1ページ

目標	▷独特な奏法による音色の変化に注意して聴こう。 ▷今までに聴いた木管楽器との違いに注意しよう。 ▷尺八の奥深い豊かな表現を味わおう。
項目	楽曲と尺八について, 尺八の奏法
写真, 図	演奏中の写真(2人, 座奏), 「鹿の遠音」の楽譜(例), メリ, カリ, 尺八(正面, 裏面)
その他の尺八曲(学年)	「ノヴェンバー ステップス」第1番 (2.3年上)
備考	虚無僧の写真なし 五線譜なし 器楽の口絵に尺八のカラー写真と解説が記載

(10) 2002年度

教科書情報	畑中良輔ほか8名 『中学生の音楽』, 2001年検定済
タイトル	日本の楽器の響き 尺八曲「巢鶴鈴慕(鶴の巣籠)」-作曲者不詳-
学年, ページ数	2.3年上, 1ページ(カラー)
目標	○独特な奏法による音色の変化に注意して聴こう。 ○尺八の奥深い豊かな表現を味わおう。
項目	楽曲について, 尺八の奏法
写真, 図	尺八の独奏(川村泰山=尺八), 尺八の楽譜の例, メリ, カリ
その他の尺八曲(学年)	なし
備考	五線譜なし 1998年改訂の学習指導要領で鑑賞共通教材の指定がなくなった

(11) 2006年度

教科書情報	畑中良輔ほか7名 『中学生の音楽』, 2005年検定済
タイトル	日本の楽器の響き 尺八曲「巢鶴鈴慕(鶴の巣籠)」作曲者不詳
学年, ページ数	1年, 1ページ(カラー)
目標	◆独特な奏法による音色の変化に注意して聴こう。 ◆尺八の奥深い豊かな表現を味わおう。
項目	楽曲について, 尺八の奏法について
写真, 図	尺八の独奏(青木鈴慕), 尺八の楽譜の例, メリ, カリ
その他の尺八曲(学年)	なし
備考	五線譜なし

(12) 2012年度

教科書情報	小原光一ほか13名 『中学生の音楽』, 2011年検定済
タイトル	尺八曲「巢鶴鈴慕」作曲者不詳(琴古流古典本曲)
学年, ページ数	1年, 2ページ(カラー)
目標	●尺八のさまざまな音色やその変化を味わいましょう。 ●拍を感じさせない自由なリズムによる, 独特な旋律の特徴を感じ取りましょう。
項目	楽曲について, 音のでるヒミツ, 【メリとカリ】, 宇宙を旅する「巢鶴鈴慕」, ■「初段」の音の動き(図形で表わしたもの), ■「初段」で用いられるさまざまな奏法
写真, 図	尺八: 青木鈴慕, 尺八を吹くときの基本となる音, 尺八の音域, メリ, カリ, ボイジャー1号とレコードジャケット, 図形楽譜, 「巢鶴鈴慕」の楽譜, 尺八の 各場所の名前が書かれた絵
その他の尺八曲(学年)	なし
備考	図形楽譜など, 視覚的な要素が増加 器楽の教科書では「都山流本曲」として「鶴の巣籠」が掲載

教科書の変遷を概観していえることを以下にあげる。

- ① 「鹿の遠音」は学習指導要領では1969年から1998年まで鑑賞共通教材として示され、1972年から2001年まで教科書に掲載されていた。しかし、1998年の学習指導要領改訂で鑑賞共通教材が指定されなくなると、2002年度の教科書から、掲載曲が「鹿の遠音」から「巢鶴鈴慕」に変わった。
- ② 1972年度、1978年度、1987年度、1990年度、1993年度には掲載されていた五線譜の楽譜が1997年度のものから掲載されなくなった。
- ③ 1990年度までは参考曲として曲名が示されるのみであった「ノベンバーステップス」が、1993年度、1997年度では1ページ使用し、鑑賞教材の1つとして掲載された。
- ④ 2002年度以降、木管楽器との音色の比較を行うようにする指示がなくなった。
- ⑤ 尺八曲を扱う対象学年が3年→2.3年上→1年と変化した。
- ⑥ 尺八の奏法に関し、1978年度はメリ音、カリ音、ユリ音、ムラ息、ナヤシの5つ、1981年度から1997年度までは、メリ音、カリ音、ユリ音、ムラ息の4つが掲載されていた。これに対し、2002年度、2006年度ではメリ、カリの2つになり、2012年度ではこれまで扱われていなかったスリ上げ、コロコロ、タマネの解説が加わった。

以上をまとめると、尺八曲の掲載を増やしたり変更したりする中で様々な指導法が提示されるとともに、「鹿の遠音」の五線譜の掲載や、掲載する奏法の取捨選択がその都度行われており、「鹿の遠音」の指導法の多様さを確認することができる。

「鹿の遠音」は約30年間に渡り鑑賞共通教材として示され、音楽の教科書に掲載されてきた。今回の調査対象である教育芸術社の教科書では2002年度以降「鹿の遠音」の掲載はされていないが、教育出版社の教科書では、「箏の関連鑑賞曲」という位置づけで「鹿の遠音」が掲載されている。

Ⅲ 授業実践の視点

宮本憲二は、文部科学省が実施した「平成14年度公立小・中学校における教育課程の編成実施状況」調査、『教育音楽中学・高校版』2003年6月号における「和楽器授業のいま」と題したアンケート調査、鹿児島県総合教育センター発行の『指導資料』第33号における「我が国の伝統音楽の指導の進め方－和楽器を活用した指導の充実」のなかでの調査結果をもとに、中学校でどの和楽器がどの割合で用いられているかを分析している（宮本2009：1-19）。その結果は、おおむね、箏、打楽器類（和太鼓を含む）、三味線、笛の順となり、尺八はその次である。その割合は、たとえば上述の文部科学省のデータによると、和楽器別の学校数の割合は、中学1年～3年では箏が40.0%（1年）、58.6%（2年）、33.4%（3年）であるのに対し、尺八は3.3%（1年）、7.2%（2年）5.1%（3年）という結果である。このように、尺八が取り上げられる割合は、和楽器が必修化された2002年度当初は、和楽器のなかでも相対的に低かったといえよう。

こうした割合について最近のデータを持ち合わせていないが、尺八を用いた授業についての先行研究や授業実践事例は着実に蓄積されている。それらを概観すると、大きく以下の5点の特徴をあげることができる。

- ① 視聴覚教材による鑑賞が中心であるが、尺八の実演を取り入れるため、地域の尺八奏者、愛好家をゲストティーチャーとして招聘する試みが行われている。
- ② 鑑賞の際、フルートやアルトリコーダーなど、他の管楽器との比較によって尺八の特徴を探るものが多く行われている。
- ③ 尺八の表現活動も模索されているが、本物の尺八を用いた実践事例は必ずしも多くない。代用楽器として、簡易尺八や塩化ビニル管を用いた実践が行われている。また、塩化ビニル管で生徒自ら手づくりで代用楽器を製作する活動も行われている。その上で、本数が少なくても、本物の尺八にふれることで、尺八のよさを感じ取っている事例が多い。
- ④ 尺八の6つの音を用いた簡単な曲、わらべうたなどを演奏したり、簡単な旋律を創作したりして、演奏する活動につなげている事例が多い。
- ⑤ 郷土の伝統音楽と尺八を関連づけた授業実践事例は管見の限り見当たらない。

そこで、高木は自身の授業のオリジナリティとして、次の3点を試みることにした。

- ① 「鹿の遠音」の鑑賞では、映像による奏法の確認と同時に教師自身がデモンストレーションをすることで生徒の意欲や理解度を高める。(デモンストレーションを行った奏法：メリ、カリ、ムラ息、スリ上げ、スリ下げ、ユリ)
- ② 〔共通事項〕の「音色」に着目することで、尺八の一番の魅力ともいえる音色を重視した授業実践を行う。
- ③ ペットボトル、塩化ビニル管による簡易尺八(市販のもの)、本物の尺八の3種類を用い、ローテーションしながら尺八演習をすることで、本物の楽器不足を補うと同時に、段階的・効率的な授業展開を模索する。

IV 授業実践

2011年11月末に、島根大学教育学部附属中学校において、授業実践を行った。ここでは、高木が演奏経験で得た知見を基に、尺八の音色に着目し、①自身の演奏を含んだ指導、②他の楽器との比較ではなく、尺八そのものの音色に焦点をあてた鑑賞、③本物の楽器を用いた表現活動の3点に絞り、授業開発を行った。

今回の実践の目的は、尺八特有の音色に着目し、鑑賞と表現の両面から尺八の魅力を伝える授業を行うには、どのような展開がふさわしいかを明らかにする、というものである。

○題材名 「尺八の音色の魅力を感じ取ろう」

○対象 附属中学校第3学年(4クラス)

○実施日

〔3年1組〕2011年12月12日(金)6校時、2011年12月6日(火)2校時

〔3年2組〕2011年11月29日(火)4校時、2011年12月6日(火)4校時

〔3年3組〕2011年11月29日(火)6校時、2011年12月8日(木)4校時

〔3年4組〕2011年11月30日(木)3校時、2011年12月8日(木)2校時

○題材の目標

尺八の演奏や鑑賞の活動を通して、尺八の音色の魅力に気付くことで、日本の伝統音楽に親しむ態度を養う。

○使用教具 ペットボトル、塩化ビニル管尺八25本、尺八10本

○附属中学校指導教員 小村 聡

1. 題材について

琴古流古典本曲「鹿の遠音」は二本の尺八の掛け合いによって、山奥で雄鹿と雌鹿が鳴きかわす声を表現した曲である。「メリ」「カリ」「ムラ息」などの尺八に特有の奏法が多数使われており、尺八の音色の豊かさに気づくことのできる曲である。

尺八は五線譜とは異なる記譜法が用いられており、息のもれる音や音程の定まらない音も音楽として味わうなど、生徒たちが普段よく耳にする音楽とは異なる特徴を多く感じることができる。

2. 授業の概要

授業は2時間構成で行い、1時間目に「鹿の遠音」の鑑賞、2時間目に尺八の表現活動をおこなった。授業の主な流れを次の表に示す。

次	ねらい	おもな学習活動	評価	評価の方法	
1次	1	<ul style="list-style-type: none"> 尺八に興味関心をもつ 「鹿の遠音」から尺八の奏法や多彩な音色を感じ取る 	<ul style="list-style-type: none"> 楽器の名前あて 尺八の概要説明 鑑賞「鹿の遠音」(CD,DVD) 主な奏法の確認 (DVD) 感想記入 	エ	ワークシート 発言の聴取
	2	<ul style="list-style-type: none"> 実際に尺八を吹き尺八の奏法や独特の響きを感じ取る 	<ul style="list-style-type: none"> ペットボトルで練習 塩化ビニル管での簡易尺八体験 本物の尺八演習 (別室) 特殊奏法の実践 曲に挑戦 鑑賞「六段の調」(教師による生演奏) 感想記入 	ア	ワークシート 体験の観察

〔1時間目〕

○授業の流れ

最初に、生徒の和楽器に関する予備知識を把握するため、知っている和楽器の名前をあげさせた。その後、楽器名を伏せて尺八の音を流し、何の楽器の音か質問し、正解として、実際に本物の尺八を高木が吹いて見せた。尺八の構造や種類について、

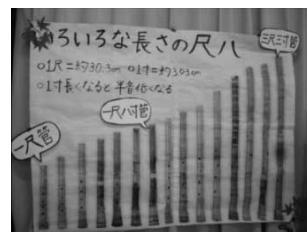


写真1 実物大の尺八拡大図

実物大に拡大印刷した図（写真1）などを用いて簡単に説明した後、琴古流古典本曲「鹿の遠音」の鑑賞を行った。

最初に鑑賞する際は、音のみで曲の雰囲気や印象、どのような音色が聴こえたかなどをワークシートに記入、発表させた。その後、ロ、ツ、レ、チ、ハ（レ、ファ、ソ、ラ、ド）以外の音はどのように出していたか生徒に想像させた後に、映像や教師の実演により尺八の奏法の紹介を行った。その後、「鹿の遠音」ではどの奏法が使われていたか確認しながら映像で「鹿の遠音」を鑑賞した。使用した映像は『音楽の鑑賞指導教材活用の手引中学校第2学年』（尺八：青木鈴慕、青木彰時）（レーザーディスクNo.ONK-302添付、音楽鑑賞教育振興会；パイオニア株式会社）である。この際、単なる奏法の確認で終わるのではなく、その奏法により、曲からどのようなイメージが喚起されるか意識しながら鑑賞するよう伝え鑑賞を進めた。鑑賞後、どのような情景を表した曲であるか、なぜそう感じたかワークシートに記入、発表させ、雌鹿と雄鹿が山奥で鳴き交わす様子を描写した曲ということを伝え、鑑賞を終えた。

その後、琴古流の「鹿の遠音」の楽譜と都山流の「故郷」の楽譜（図1）、尺八の運指表を配布し、比較することで流派によって記譜法や歌口の形が異なることを伝えた。尺八の歴史に関しては虚無僧の絵を見せながら行った。また、松江市宍道町には「鹿の遠音」の楽譜が保管されていることを話し、松江市は尺八にゆかりのある土地であること、身近なものだということ意識させた。

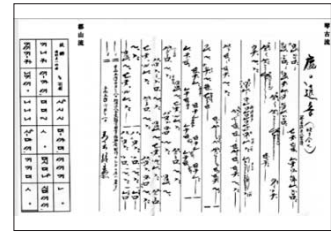


図1 琴古流・都山流の楽譜

最後に授業の感想を書かせる際、BGMとして「春の海」を流し、尺八は独奏だけでなく箏との合奏など、さまざまな演奏形態で用いられていることも伝えた。

○生徒の様子・反応

導入で和楽器の名前をあげさせた際、全クラスで、尺八、箏、篠笛、和太鼓、三味線等の名前があがり、多くの和楽器の名前を知っているということが分かった。しかし、楽器名を伏せて尺八の音を流し、楽器あてクイズを行うと、どのクラスでも、篠笛と尺八でほぼ半々に意見が分かれ、楽器名と音色が結びついていないことも分かった。

「鹿の遠音」の鑑賞では、尺八のかすれた音や、ゆるる不安定な音など、さまざまな音色の変化に気付くことができていた。映像による鑑賞では、生徒から「顔からしっかり表現しているところがすごかった」などの意見があがるなど、「鹿の遠音」を全身全霊で演奏する奏者の姿に強く興味を抱いていた。また、奏法の確認では、生徒が今まで演奏してきたリコーダーにはない多くの奏法にくぎ付けになっていた。特に、ムラ息に対する反応が一番大きく、尺八からでる音色の幅広さに、大きく関心を寄せていた。

生徒の感想の一部を以下にあげる。

- ・尺八にしか表現できない「鹿の遠音」だと思った。
- ・音が1つ1つクリアじゃないところとかが、朝日とか山とか日本の風景を思わせる感じがした。
- ・尺八は曲に込められている感情をととても豊かに奏でられる楽器なんだなあと感じた。

- ・いろいろな奏法を使うことによって表現が広がっていると思った。
- ・同じ音でも表現の方法によって色々な音色を出せて奥が深いと思った。
- ・孔が少ない分、一つの音に関してたくさんの奏法があり、とても深い楽器だと思った。
- ・尺八だけの音楽を聴くと、その音色について詳しく耳をかたむけることができた。
- ・難しそうだけど、尺八をやってみたくなった。

〔2時間目〕

○授業の流れ

最初にペットボトルで音を鳴らす練習をさせ、音が鳴るイメージをつかみやすくさせた。(写真2)その後、演奏上の基本的な説明を行ってから、生徒2人に1本ずつ塩化ビニル製の尺八を渡し、ペアで交互に音を出していった。(写真3)音を出すためのポイントを全体で確認し(図2)、それをペアでチェックし合うことで、音の出るポイントを探させた。すぐに音を出すことができた生徒には、全体の前で音を出すコツを発表させた。どうしても音が出ない生徒には、リコーダーで尺八の奏法の擬似体験を行うよう促した。

また、塩化ビニル管と同時進行で、10人ずつ本物の尺八演習を行った。(写真4)ここでは尺八の演奏技術を身につけることが目的ではないこと、鑑賞だけではわからない実際の楽器の重みや質感、振動が手に伝わる感覚などを感じることなどの声かけを行った。また、別室で行うことで、本物の尺八の音色に集中させた。

尺八を吹いた感想を3, 4名に発表させ、振り返りを記入させた。

最後に高木の尺八、同じ大学院生の田中沙織さんの箏で「六段の調」を演奏した。尺八だけでなく箏の演奏も聴くことで、他の和楽器にも興味をもたせ、今後自ら日本の伝統音楽を学ぶきっかけとなるようにした。

音楽室にごさを敷き、正座をして演奏を行ったり、もみじの葉っぱを音楽室に飾ったりするなどして、雰囲気作りにも配慮した。また、今後松江市で行われる尺八の演奏会や、テレビやラジオで日本の伝統音楽が放送される予定を伝え、授業中だけで伝統音楽とのつながりが終わらないよう工夫した。



○生徒の様子・反応

楽器を持ってすぐは尺八を顎にあてる角度や息を入れる角度がつかめず苦勞していたが、徐々に音が出る生徒が増えていった。教師が、1人ずつ尺八を口にあてる角度を調節することで、約8割の生徒が音を出すことに成功した。音を出すことができた生徒は、自分の吹く尺八からでる音色を楽しんでいた。

感想から、多くの生徒が、尺八の音を出す難しさを体験し、尺八の音色の魅力に触れることができていたと分かった。一部の生徒からは「尺八が欲しいです。どこで購入できますか?」という発言や、伝統音楽の放送予定に関する質問もあり、尺八に大きな興味を持った生徒がいたことが目に見えて分かった。

生徒の感想の一部を以下にあげる。

- ・音が出たとき、すごく深みのある音でとても素敵だった。また吹いてみたい。
- ・本物の尺八はどっしりとした音が出ていたと思った。
- ・竹というか、自然な音だった。
- ・かすれ具合が、風情があってよかった。
- ・リコーダーとの最大の違いは音に重みや渋みがあることだと思った。
- ・思っていたよりも息がたくさん必要で、とても難しかった。
- ・日本の音楽がより好きになった。
- ・これからもいろいろな機会を通して尺八にふれていきたい。

2時間の授業を通して振り返ると、1時間目の最初に「鹿の遠音」を鑑賞した際は「かすれた音がした」というような反応があるだけで、生徒は尺八の魅力にはまだ気づいていなかった。しかし、2時間目の授業後には多くの生徒が尺八の音色に対し多様な言語表現で積極的に感想を記入しており、尺八の音色の魅力を感じ取ることができていたといえる。

今後は、尺八の演奏ができない教師でも同じように授業ができるよう、授業の流れを再構成するとともに、表現活動においては、(図2)のような標準的な尺八の位置と息を入れる角度の例だけでなく、角度に関するさらに細かな留意点や指導例を作成する必要があると考える。

V おわりに

以上、本稿の前半では教科書における尺八の教材の変遷をたどり、教材としての「鹿の遠音」の位置づけを明らかにした。後半では、高木が、島根大学大学院教育学研究科の「学校教育実践研究」として、島根大学教育学部附属中学校の第3学年の生徒を対象に行なった授業実践記録に基づき、「鹿の遠音」を糸口とした授業の試みを報告し、尺八を用いた授業の可能性と課題について検討してきた。

その結果以下の3点について、成果を確認することができた。

第一に、流派など「鹿の遠音」の曲の基本的情報について整理した。

第二に、「鹿の遠音」に着目しながら教科書の変遷をたどっていき、そのまとめとして6点提示することで、「鹿の遠音」の指導法の多様性に言及した。

第三に、授業実践にあたり、①自身の演奏を含んだ指導、②他の楽器との比較ではなく、尺八そのものの音色に焦点をあてた鑑賞、③本物の楽器を用いた表現活動の3つにポイントを絞り授業を行った。その結果、高木自身の尺八演奏経験をもとに授業を立案し、その有効性を示すことができた。

1998年の学習指導要領改訂に伴い、和楽器の学習が必修化され、音楽科教育における和楽器の重要性はますます高まっている。

しかし、教科書では約40年前から「鹿の遠音」が掲載されており、決して新しいものではなく、「鹿の遠音」は、むしろ伝統ある教材といえる。1990年代以降に入ると「巢鶴鈴慕」や「ノヴェンバー・ステップス」なども取り上げられ、尺八の教材が多様化してきた。しかし、この研究で触れたように「鹿の遠音」の教材としての魅力や優れている点は多く、今後の教材開発の可能性をさらに模索できるのではないかと考えている。今後は松江市宍道町に保管されている「秘曲鹿遠音譜」を手がかりに、郷土の音楽の側面を併せもつ教材開発につなげていきたい。

授業実践の後、2011年12月15日に、附属中学校の小村聡教諭と高木、藤井で、事後検討会を行なった。小村教諭には、「学校教育実践研究」にあたって、年度当初の計画立案の段階より継続して指導助言を仰いできた。小村教諭からは、まとめと今後の課題として、次の4点について指摘があった。

- ① 教師が実際に尺八を演奏することで、生徒に「自分も演奏してみたい」という気持ちを抱かせており、効果的であった。
- ② ペットボトルでの導入は、生徒が歌口と息を入れる角度を決定する上で有効な手段であった。
- ③ 「鹿の遠音」の鑑賞では奏法による音色の変化という視点が中心になり、尺八の一音の美しさという視点からのアプローチが弱かったのではないかと感じた。
- ④ 尺八の授業後に行った和太鼓の授業では、授業前から同じ和楽器である和太鼓に対して生徒の興味関心が従来以上に高くなっていただけだと感じた。また楽器の扱いに関しても、指示を出さない状態でも大切に楽器を扱っており、本物の尺八に触れたことが良い影響を与えていると感じられた。

以上の点を、今後の研究に生かしていきたい。

付記

本稿は、2012年3月3日（土）に高知大学において開催された平成23年度日本音楽教育学会中国・四国地区例会で口頭発表した内容の一部を再構成し、発展させたものである。なお、この発表に際して「島根大学大学院学生に対する学会発表等に関する奨学金」の補助を受けた。

謝辞

本研究の実施に当たって、「学校教育実践研究」で附属学校側指導教員として、ご指導くださった島根大学教育学部附属中学校教諭の小村聡先生、尺八を多数お貸しくくださった島根大学教育学部の河添達也教授にお礼申し上げます。

引用・参考文献

※Ⅱ-2の教科書調査に使用した教科書は表中に記載した。

- 1) 清水宏美『和楽器・日本の音楽を楽しもう！中学校3年間で多様な音楽体験を目指す実践事例集』音楽之友社, 2003.
- 2) 神田可遊「鹿の遠音作られた近代感覚の曲」『邦楽ジャーナル』2009, 7月号(vol.270), p.53.
- 3) 酒井董美; 藤井浩基『島根の民謡－歌われる古き日本の暮らしと文化－』三弥井書店, 2009.
- 4) 宍道町史編纂委員会『宍道町史全一卷』宍道町, 1963, p.433.
- 5) 筒石賢昭「日本の伝統音楽の基礎的教授法について～尺八の音楽教育導入への基礎的アプローチ」『東京学芸大学紀要』第60集, 2008, pp.11-30.
- 6) 田中健次; 八木正一『クイズ教材でたのしむ日本音楽の授業』学事出版, 2011.
- 7) 田中健次『ひと目でわかる日本音楽入門』音楽之友社, 2003.
- 8) 田中健次『図解日本音楽史』東京堂出版, 2008.
- 9) 月溪恒子『尺八古典本曲の研究』出版芸術社, 2000.
- 10) 都山流尺八楽会『都山流尺八音譜解説』財団法人都山流尺八楽会, 2004.
- 11) 都山流尺八楽会『尺八を吹こう』財団法人都山流尺八楽会, 2002.
- 12) 西邑裕子編著『日本の伝統音楽を授業する』明治図書, 2010.
- 13) 福井昭史『よくわかる日本音楽基礎講座雅楽から民謡まで』音楽之友社, 2006.
- 14) 古川茂「木幡吹月」『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社, 1997, pp.255-256.
- 15) 丸山妙子「戦後音楽教科書に見る日本音楽の扱いの変遷（Ⅰ）—昭和22年～昭和36年まで—」『東海大学課程資格教育センター論集』第5号, 2006, pp.61-77.
- 16) 丸山妙子「中学校音楽教科書に見る編纂趣意：昭和22年から昭和36年まで」『東海大学課程資格教育センター論集』第6号, 2007, pp.67-86.
- 17) 宮本憲二「中等科音楽における生徒の理解に着目した和器楽指導：『箏』を扱った授業における効果的な指導とは」『尚美学園大学芸術情報研究』第16号, 2009, pp.1-19.
- 18) 文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社, 2008.